

● 5月選評

小島なお

・松下 誠一（東京都）

自己暗示とけてポプラも怖くなる

生まれて、学校に通って、大人になって、働く。自分が自分であると思うのは、自己暗示の約束の上に成立しているのかも。いつか解けてしまいそうな約束。

・由良伊織（東京都）

極まってく天気予報は
かわいくて見て見て、
泉屋のクッキーだ

「見て見て」で強引に繋がれる豪雨、猛暑つづきの天気予報と愛らしいクッキーアソート。かわいさを共有する会話はしばしば乱暴で理不尽、だからこそ純だ。

・汐見りら（東京都）

どうしても
ポン酢のポンはオランダ語
あの夏のことは早く忘れて

ポン酢の語源はオランダ語で柑橘系の果汁を意味する「ポンス」。腑に落ちないけれど、それは動かせない事実である。忘れるしか方法がないあの夏の事実。

・羊夏生（東京都）

銀河の彼方からズレ始めた靴の
靴ズレの痛みは銀河の彼方から

試着ではあんなに馴染んでいたのに。道を歩き出すと否応もなく擦れ始める靴。足の違和が全身を支配してゆくあの途方もなさは銀河からやってきてたのか。

・太代 祐一（神奈川県）

点滅をするのは亀までにしてね

信号もオーナメントもときどきはみずからの感覚さえ。世界には点滅をして合図を送ってくるものが多すぎる。受けとるばかりは疲れるので、せめて亀まで。

・雲理そら（大阪府）

車窓にもうつらない顔桃のかご

桃を抱えて車内に揺られる。お見舞いだろうか。物思う表情がうつればさまになるのかもしれない。冴えない表情は車窓にもうつらないという現実的な切なさ。

・洋梨 またら（群馬県）

雨は降る

貧乏ゆすりに童顔で

心の襖にだれもいなくても

貧乏ゆすりと童顔のミスマッチ。そして心の襖。捉えどころのない自身の捉え方に魅惑的な不安が漂う。いつも不在の和室には、しつとりと雨の気配が這う。

・福山ろか（埼玉県）

紫陽花は黄緑の新美術館

脱色されたような黄緑色の紫陽花。小さな花が集合してひとつの珠をなす紫陽花のフォルムは先鋭的でエシカルな美術館のおもむき。「新」のひびき。

・折原（神奈川県）

すきまかぜ着陸地点に

焼き菓子置いて

わずかにもてなしている

たとえすきまかぜであっても、それは外からの来訪者である。自分を訪ねてきてくれることへのささやかなお礼として。つまらないものですが、と一言添えて。

・牛田 悠貴（東京都）

ひつじさえ

さかなのようなくちをしてねむる

ゆうぐれ しんくのおい

夢の草原で数えていた羊さえ眠るときは口を半開きにする。どんな獣も人間も眠るときには命の原初の姿に近づくのだろうか。シンクにもやがて海が満ちて。